

最新医療の現場



小児そけいヘルニア治療の最先端 内視鏡下そけいヘルニア手術「LPEC(エルベック)法」

徳島大学病院 小児外科・小児内視鏡外科 科長 髙原裕夫 たけはら ひろお

■問い合わせ 小児外科外来 Tel.088-633-7138

■はじめに

従来のそけいヘルニア(脱腸)手術では、そけい部(足の付け根)を約3cm切り、ヘルニア嚢(袋)を精管や精巣血管から剥離して、縛ってふさぐという手術を行うのが一般的でした。従来のこの手術法だと切開による傷が残る、男の子では剥離の際に精管や精巣血管を損傷するリスクもあり、まれに男性不妊の原因になることもありました。また未熟児などの小さな赤ちゃんにとってはこの手術は難しく、より大きなダメージを与えるものでした。そこで侵襲(身体へのダメージ)の少ない内視鏡下手術を、赤ちゃんの手術へ応用するために研究を重ねてきました。内視鏡を利用すれば、2~3ミリ程度の小さな傷で安全に短い時間で手術することができ、しがって痛みも少なく、回復も早くなります。90年代初頭からそけいヘルニアの内視鏡検査を始め、1995年10月には徳島大学病院で内視鏡によるそけいヘルニア手術[LPEC法]が開始されました。

■最新のそけいヘルニア手術「LPEC法」とは？

[LPEC法]は、徳島大学病院小児外科で開発した腹腔鏡(内視鏡)下そけいヘルニア手術のことで、国内で最もよく行われている内視鏡を使った小児ヘルニア手術法です。お臍から4.5ミリ

の内視鏡を入れ、その横から2ミリの大きさの器具をお腹の中に入れて、当科で開発した糸付きの特殊な1.5ミリの針をそけい部(足の付け根)から刺してヘルニア嚢を縫い閉じるという方法です(下図)。LPEC法で手術を行うと、小さな傷のために傷あとも目立たず術後の痛みが少なく、精管や精巣血管を損傷する危険も減少し安全に手術できるようになりました。また内視鏡を用いることで反対側のそけいヘルニアの有無も確認でき、見つかった場合は両側とも一回の手術で閉鎖することができるなど、多くの利点があります。手術時間は両側そけいヘルニア例の場合、男児で約20分、女児で約15分です。LPEC法は2006年の国際学会でも高い評価を受け、海外で行われている他の方法と比較してもっとも合併症の少ない術式として認められ

ています。現在、日本小児外科学会認定施設の約56%の施設において導入されており、さらに普及していく傾向にあります。

■全国一を誇る小児内視鏡下手術実施率

徳島大学病院 小児外科・小児内視鏡外科では、年間220例以上の赤ちゃんや小さなお子さん達の手術を行っています。そけいヘルニア以外にも陰嚢水腫(陰嚢に水がたまり腫れる病気)、停留睪丸、虫垂炎、便秘、先天性消化管奇形などの腹部の病気を含め、小児の漏斗胸や肺などの胸部疾患に対しても内視鏡下手術を行っています。その数はすべての手術の60%近くにおよび、その実施率は全国一を誇ります。

▶男児における「腹腔鏡(内視鏡)下そけいヘルニア手術」
LPEC針で腹膜前腔にある精管や精巣血管を傷つけないようにヘルニアの入り口の全周に糸を通し、結紮することでヘルニア嚢を閉鎖する。

